

佐藤モ二カ歌集『夏の領域』

駒田晶子

やわらかいけれど、こよひ

「明るい第一歌集だ。タイトル『夏の領域』のとおり、色とりどりの花が咲き、南国を感じさせる表紙の絵。表紙をめくると深いオレンジ色が広がり、どんな季節に暮らしている読者であっても、一瞬にして作者の〈夏〉に引き込まれてゆく。

- ・夏蝶を捕へしごとく指先に今朝のアイシャドー少し残りて
- ・猫よけのペットボトルにすりすりをしてゐる猫よあつばれである
- ・マンホールに馬の絵のある町に住みき折々思い出すたてがみ
- ・ふさふさと尾をたててゆくものたちの後に続いて信号わたる

歌集一冊、登場する生き物、そして家族の気配に満ちている。一首目の色鮮やかな詩性、二首目のユーモア、三・四首目に差しこむ想像力の光。その気配はあたたか

く、やわらかく、読む者を心配させない。

- ・ブラジルにコーヒー飲めば思ふなりサントス港に降り立ちし祖父
- ・ああジョアンナ懐かしいわと抱きつく人母には母の故郷がある
- ・ティーポットに夕暮れの色たまる頃自転車を漕ぎいもうとは来る
- ・弟に牛タン二枚分けやりて姉の顔をす仙台太助

・愛されてこの世去るひとそのひとの祭壇の花のやうなり雲は

作者の祖父はブラジルにルーツを置いた。自分とは異なる故郷を持つ母。自転車で行き来できる距離に暮らす妹。嘶家になった弟。明るいことばかりではないだろうが、意識的に、いや、願いをこめるかのように作者が詠わない〈領域〉があるのだろうと感じた。五首目、叔父の死を詠う場面ですら、今生の別れの悲しみより、生前と変わらない愛が浮かびあがる。

- ・君の育ちし町を訪ねて呑気なるわれはタコスをたらふく食へり
- ・学生番号ハロー。ゴージャーの君がまた缶

ン鳴らし帰り来るなり

・酔ひ深き夫がそのみ繰り返す沖繩を返せ沖繩を返せ

・どちらが勝つても悲しいものが残りさう夫と連れ立ち投票へ行く

沖繩を故郷とする〈君〉と恋をし〈夫〉とし、共に沖繩に暮らすようになる。移住者として三首目の感覚は、とても重要だ。原発事故後の福島を知る私は、実感できる数による正解を選択する現実は、苦しい。

- ・この朝をわれより発ちて戻らねば吾子はまぶしき春となりたり
- ・子を抱き逃げまどふ夢醒めし後臉にふかく戦火刻まる
- ・なべて女の産みたる命その命くづほるとき嘆きのピエタ

Ⅲは子どもを得た後の作品。母となり、肉体で生死を感じたのだろうか、歌に自然な陰影が滲む。二・三首目の読後感、作者の新しい持ち味となるのかもしい。作者の意思による〈明るい〉色彩が、子を持ったことにより、これからどんな濃淡を生むのか。作者の生きている背骨が感じられる第一歌集は、気持ちよかった。